

横田 穰少佐と日出生台

矢 島 嗣 久

二 陸軍入隊

横田穰は画家を志したが、考へるところがあつて、やがて陸軍軍人となる。新兵教育機関である陸軍教導団にはいり、卒業後、教導団付及び浦賀要塞（現神奈川県横須賀市）砲兵監部練習所付となつた。

明治三三年（一八九〇）、下関要塞（山口県）砲兵聯隊に勤務、同二七年（一八九四）日清戦争（明治二七年、一八九四）八月から二八年（一八九五年）四月に出征、旅順港背面攻撃に参加、翌年人字しよう砲台長勤務中に砲兵少尉に任官する。戦後凱旋して、下関要塞砲兵聯隊付勤務となる。

明治三三年（一八九九）、陸軍砲工学校に入校し、軍事学はもちろん、高等数学、力学、弾道学、馬術、馬政学、英語、ドイツ語を学んだ。また東京大学のドイツ人教授について、コンクリート工学を修めた。三三年、函館陸軍兵器支廠長、三六年（一九〇三）函館要塞司令部々員、翌年同部付きとなつた。

三 旅順攻撃

明治三七年（一九〇四）二月、日露戦争が始まつた。

六月六日、乃木希典^{まれば}大将・軍司令官が率いる第三軍が遼東

横田 穰^{みのる}は日露戦争の旅順攻撃に戦功があり、戦後大分県日出生台演習場の主管として赴任し、植林に功績を残した。横田は退官後、別府市で余生を送り、昭和二五年に死去した。

一 横田穰の出生

横田 穰は、慶応元年（一八六五）四月一日（一八日という説もある）、四国、徳島県麻植^{おえ}郡川島町に、漢方薬製造を家業とする横田立太郎の長男として出生。

穰は、川島中学校を卒業後、一年半東山小学校教員として勤務する。彼には姉と妹が各一人ずつあつたが、妹に養子を迎えて家を継がせた後、画家を志して上京した。

東京では江戸中期の画家丸山応挙^{なつかれ}の流を汲む日本画家川端玉章（一八四二〜一九一三）の門下生となり、修業を続けた。

半島に上陸を開始する。八月一九日に旅順要塞攻略戦として第一回総攻撃を行った。

一・三メートルのベトン（コンクリート、フランス語）で固められた旅順要塞はなかなか落ちない。一・三メートルのベトンを割るには、最小二二センチ（センチメートル）口径の砲が必要である。東京湾観音崎砲台の二八センチリゅう弾砲を旅順背面へ移動させ、築設することになった。

二八センチ砲は、砲の口径が二八センチ、砲身長が二・八メートル、砲身重量は一〇・八トン、砲弾重量二一七キロ、射程距離七、八キロメートルで、総重量が二四トンあった。この砲は明治一六年（一八八三）にイタリアから購入したものを大阪砲兵工廠で国産化したものである。その砲床構築に横田穰砲兵大尉が起用された。

横田は、第三臨時築城団備砲班長を命ぜられ、旅順攻囲軍に参加した。普通、二八センチの砲の据え付け工事には一ヶ月以上かかるといわれていた。

九月一四日には砲が現地に到着した。横田穰大尉指揮の砲床構築はわずか九日間で団山子・鞠家屯・きょう家屯にこれらの据え付けを完了させる。三〇日午前一〇時には第一発が東雉冠山に向って撃ち込まれた。さらに椅子山、松樹山、

二龍山などにつきつぎと撃ち込まれた。

二八センチ砲は最初六門が到着し、のち一八門となった。

一〇月二六日に第二回総攻撃を行う。

一月二六日には第三回総攻撃を行い、一二月五日に二〇三高地を占領した。この日から五日間のうちにロシア旅順艦隊を全滅させた。

翌明治三八年（一九〇五）一月二日に旅順を開城する。

横田穰は、のち功により勲四等旭日小綬章を授けられた。同年十一月に帰還して、忠海砲台備砲引き下ろし作業に従い、終って兵器本廠に勤務する。翌三九年大阪陸軍兵器支廠員を経て、佐世保要塞砲兵大隊長となった。

同四〇年（一九〇七）、対馬要塞砲兵大隊付を最後に予備役を命ぜられた。トミ夫人の郷里山口市秋穂あきほに居住する。横田はまだ四二歳の若さであった。

その人物と才能を惜しんだ元上官の豊島陽蔵少将てしま（第三軍攻城砲兵司令官）、日口戦争での彼の功績を高評価していた第一二師団長の浅田信興中将、旅順攻撃に二八センチリゅう弾砲の移設を提案し、砲床構築に横田大尉を推薦した陸軍審査部長の有坂成章中将（当時少将）の推挙があつて、彼が大分県日出ひじゅうだい出生台演習場の初代主幹に任命されたのであつた。

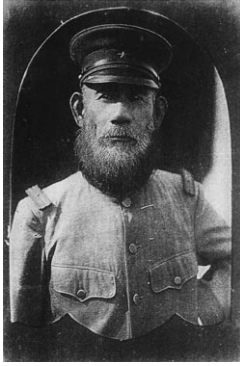
四 日出生台植林

横田穰大尉が大分県玖珠郡玖珠町日出生台に着任したのは明治四十三年（一九一〇）五月一八日である。

最初、本人は日出の海岸で魚釣りを楽しむつもりだったが、赴任地は大分県の奥地の日出生台であった。

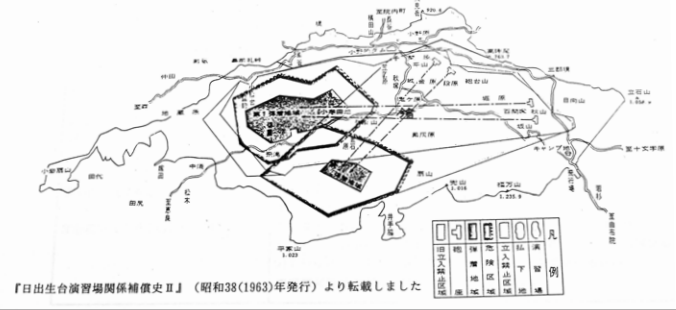
演習場の管理責任者として、まず、心配されたのは水の問題であった。周囲の山々は殆ど裸山で、大部隊が入り込むことになると、飲料水、洗濯用水、浴場用水が不足する。

横田穰は治山治水、用材、マキや木炭の原木用にと演習場の原野に植林することを決



横田 穰
初代日出生台演習場主管

大分県日出生台演習場（射撃方向図）



『日出生台演習場関係補償史Ⅱ』（昭和38(1963)年発行）より転載しました

意した。

演習に支障がない周囲の山々の植林計画が立てられ、まず北東側にある人見岳（標高九二一メートル）から植林が始められた。

穰は、二五年間の日出生台の生活で、スギ、ヒノキ、松の苗木、四五〇万本をおよそ一五〇〇ヘクタールにわたって大植林することになる。一ヘクタールは一万平方米、一五〇〇ヘクタールは約三万坪にあたる。

穰は月給や恩給の半分は苗木の費用代として、つぎこんでいたが、余暇には特技を活かして、たびたび日本画を描き、苗木代に充てていた。

歴史画・仏画・

美人画・山水画等、多く描いたが、特に達磨画が得意だった。雅号は舞仙と称した。

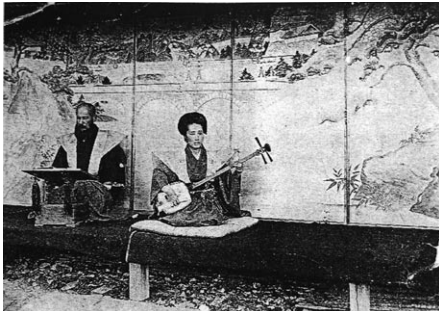


五 日出生台奨励会と婦人会

大正一二年（一九二三）二月には、散在している地区の結束を図るため「日出生台奨励会」を設立した。

奨励会では、兵舎から出る馬ふんを水田に用いて収量増に多大な効果を挙げたり、消防組合を組織して、消火、防火、特に山火事に対する訓練なども行ったりしている。

奨励会と同時に婦人会も結成され、横田夫人が代表者となって、講話や料理講習会などを催している。さらには、娯楽に乏しい地区の人々のため、青年たちが高齢者や女性を招待して素人演芸を披露する「ニコニコ会」を催したりもした。



横田は多芸の人でもあり、歌を詠み、琵琶や三味線を弾き、「ニコニコ会」でも進んで披露した。

横田は大正一二年（一九二三）以降、たびたび退官を申し出たが、そのたびに地元の農民が「慰留会」をつくって、慰留した。

穰は、昭和一〇年（一九三五）七月、七〇歳となって、ようやく退官を許された。当時、少佐

であった。退官後、彼はしばらくは日出生台に住んでいたが、やがて別府市の新別府に居をかまえ、余生を送った。

日出生台は筑後、駅館、大分各川の源流にも当たる。

最近では昭和五九年（一九八四）から平成四年（一九九二）まで九年間に、九一・八ヘクタールが植林されたが、横田の年間平均六〇ヘクタール、二五年間に千五百ヘクタールには遠く及ばない。

六 大分県営林

大分県は昭和二四年（一九四九）、国から演習場内の立木の払い下げを、二、七一三万円で請け、学校建築など戦後の復興事業にあてた。その量は二四万立方メートル（二億四、〇〇〇万円）に上った。

横田穰は生前、別府の「石垣原合戦」の紙芝居を作成した。その紙芝居を別府市扇山在住の沼田岩夫氏が所蔵されている。昭和六三年（一九八八）四月に南立石本町にある大友義統本陣跡の故古屋勝馬氏の発案で、同所にある本村天満宮ほんむらの天井画として県立短大の女学生二名が拡大模写したものが二十数枚取り付けられている。

穰の生前、日出生台の農家の人たちが別府へ出向いてきて

病床を見舞い、日出生台の話をもち出すと、造林当時の苦勞話をして、トミ夫人とともに、しきりになつかしがっていたという。

昭和二五年（一九五〇）五月六日、横田穰は八五歳の高齡で死去した。

死後、横田穰少佐の靈前には生前の原野造林の功績によつてまず昭和二五年五月に大分県議會議長から感謝状が供えられ、ついで、三一年（一九五六）一月には大分県知事、三三年（一九五八）一月には大日本山林会長から表彰状を授与された。さらに四三年（一九六八）一月には、日本農



林漁業振興会から、明治百年記念農林漁業先覚者（全国一三七名、うち林業一六名中の一人）として顕彰状が贈られた。

昭和一〇年（一九三五）、現在の小野原分校のプール付近に高さ一メートルくらいのコンクリート製の横田少佐の像が建てられた。この像は、昭和二〇年（一九四五）の終戦

当時顕撤去されて村の有志が保管していたが、昭和三七年（一九六二）三月には日出生台ダム（小野原ダム）のそばに再建された。その碑文によれば、次のように記されている。

碑文

横田翁は明治末期に日出生台演習場の主管として赴任し
広漠たる周囲の山谷が荒廢したまま放置されている現状を
目の前にして一大緑化を企画し職務の余暇、自己を省みず
私費を投じ、身をもって植栽を実行し軍部と地区民の協力
のもとに、二五年の長きにわたり高原の寒風積雪等あらゆる
困苦を克服して遂には、スギ、ヒノキ、千五百ヘクター
ルの植林を完遂されたのである。この林は近郷まれにみる
美林として生長し、昭和二四年、大分県に払い下げられ公
共用復興材として戦後の極度に枯渴した木材資源となる。
また県の財政に大きく寄与したものである。県はここに伐
採終了を期として頌徳碑しょうとくを建て翁の功績を永久に記念す
るしだいである。

昭和三七年三月

知事 木下 郁

七 横田山

日出生台の北方には当時裸山だった標高八〇六mがあった。現在、植林の父、横田穰少佐を記念して「横田山」と名付けられており、現在も美林を蓄えている。



現在の横田山

謝辞

大分市横瀬の故牧 實氏、別府市在住の河野春喜氏の方々に御教授いただきましたことを、紙上を借りて御礼申しあげます。

引用参考資料

- 『大分県の産業先覚者』 兼子俊一 一九七〇三月
Viento 平成一五年一月、『日出生台植林の父 横田穰』
『殉死（乃木希典）』 司馬遼太郎著 昭和四二年 文藝春秋社
『旅順戦抄』 池田信治著 昭和一五年 関東州戦蹟保存会
『坂の上の雲』 司馬遼太郎著 文芸春秋
『日露戦争』 小島襄 平成二年 文芸春秋
『豊後森物語 つのむれの麓』 菊池 修 平成六年七月 西

日本新聞社

『日出生台の歴史 小野原分校のあゆみ』 一九九〇 編集委員会

『大分県人物傳』

大分合同新聞社 昭和五四年一月二二日

『ダルマと横田穰』『大分人脈』 二〇二

西日本新聞大分版、昭和四四年五月一六日号

『日出生台演習場関係 補償史』

昭和三七年 補償工事期成会事務局

※ 訂正

別府史談第二七号の矢島嗣久の「挾間龍祥寺と別府宝泉寺」の記事の中の宝泉寺を法専寺に訂正する。